

あるむぜお 41

府中市郷土の森だより

al museo NO. 41

1997年9月20日



園内歳時記

郷土の森の名物事業「こめっこクラブ」は、オープン2年目から開催してきました。昔ながらの農法で、手作りの米を小学生を中心に育てていくという、博物館らしく、かつオリジナリティーあふれる内容です。毎年秋になると、園内の水田には、子供たちが汗を流して頑張った極上の成果が実るのです。お手製の

カカシは、さしずめ稲穂の番人といったところでしょうか。

郷土の森10年の歳月は、秋の収穫前、実りの季節を彷彿させる風景を、あたかも当然のごとく定着させています。園内を訪れる人たちも、毎年の収穫を心待ちにしながら、このすっきり馴染みとなった景観を楽しんでいるようです。

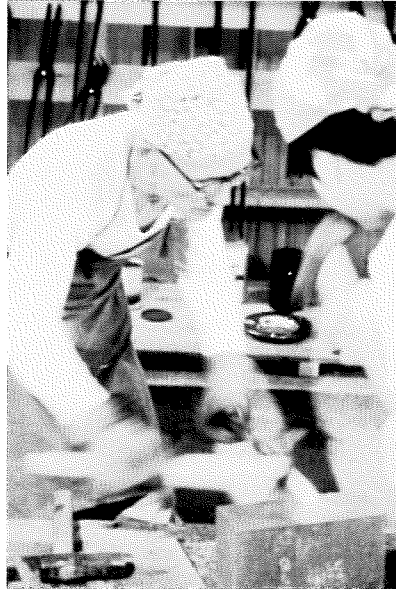
郷土芸能 と 縁日の森

10月10日(祝)
11日(土)
12日(日)

郷土の森がオープンして10周年。木々の成長とともに、ずいぶん「森」らしくなってきました。郷土の森の敷地面積は約14ヘクタール。この郷土の森の特徴である広い園内を使って、郷土の森らしい秋の催しということで企画したのが「縁日の森」です。平成6年度から、過去3回開催している「縁日の森」。本年度は「郷土芸能と縁日の森」と題し開催します。今回は、府中の森芸術劇場の協力も得て、日本の和太鼓のほか、韓国の伝統的な打楽器グループの東京サムルノリも参加します。会期中は1日5,000人～8,000人という入場者を数えて、連日大賑わいとなります。

さてこの縁日の森では、園内あちこちの道辻で繰り広げられる大道芸、親子そろって楽しむお光景が見られる紙芝居、昔懐かしい針金細工や山吹鉄砲、威勢よい武蔵国府太鼓の大太鼓、また府中囃子の笛や太鼓が縁日を盛り上げる一方で、黙々と仕事に打ち込む職人の姿が、復原古民家で見られます。商家の格子越しに並ぶだるま、茅葺き農家では籠屋が竹籠を、そしてお祭りには欠かせない提灯、今では珍しくなった車大工、その他に棒屋、鍛冶屋、座敷ぼうき、和竿(釣竿)の職人が、腕を振っています。1日でこれら職人を紹介できるのは、広い園内そして復原古民家を持った、郷土の森ならではのいいでしょう。

こういった職人が、かつてはマチの中に、ムラの中に、たくさん居住し、生活を営んでいました。そんなに昔のことではありません。しかし今日の職人をとりまく環境は、決して楽観できる状態ではありません。「おれの代で、お



しめーよ」と職人が語る後継者の問題、わざわざ農家に材料のほうきもろこしを作ってもらっている座敷ぼうき職人。ここには材料手配の問題があります。また商品の販売ルートの問題など、職人が抱えている今日の問題はたくさんあるのです。しかしここ数年、これら職人とお付き合いしていると、そんな問題を抱えているとは思えないほど、みな気さくで、明るい人ばかりです。今日のこの一日、真剣で真摯な姿が、そこに見られるのです。郷土の森で職人の技を紹介できること、それは今を大事にする職人の姿を提供できることであり、将来をも視野においた博物館のスタンスでもある訳です。郷土の森は博物館。こういった伝統技術を紹介し、そして伝統文化を次の世代に継承していくという役割を担っています。

縁日の森のお昼休み、職人が集まり、昼食となります。その折、職人が毎日使っている道具のことに話が及び、鍛冶屋さんに道具を注文するといったことがありました。長いこと使っている道具、それは職人にとっては自分の手の一部であり、近所の金物屋で購入できるような代物ではないのです。そこで自分の使い良い道具を鍛冶屋に注文する訳です。作るものは異なっても、そこは職人同志、鍛冶屋を中心に職人間のネットワークも芽生えています。

縁日の森にちなんで職人のお話をしました。縁日の森では、この他に新しい発見と触れ合いがあるはずです。どうぞお見逃しなく、ご家族連れでお出掛けになってみてはいかがでしょうか。(後藤 廣史)



星空への誘い”

宇宙へ踏み出す最初の一步

～双眼鏡～

馬場 弘修

前回は肉眼だけで楽しめる星空散歩の方法をご紹介しましたが、星座の星の並びをたどれるようになると「もっといろいろな天体を見たい」という気持ちになるでしょう。宇宙へ踏み出す最初の一步として、どんな道具を揃えればいいのでしょうか？

1 気軽に星空を楽しむ道具として、双眼鏡をお薦めします。望遠鏡のように組み立てる準備もいらず、気が向いたときに星空の好きな部分を自由に見ることができます。また、望遠鏡と違って正立像（上下左右がそのまま）で見えるため、視野への天体導入がしやすいのです。双眼鏡の威力を知るためだけならば、競馬や野球観戦で普段使っているものや、観劇に持っていくオペラグラスでも十分でしょう。その双眼鏡を夜空に向けて、肉眼では見えなかった暗い星がたくさん見えてきます。いったい何故なのでしょう？人間の眼の瞳孔（光を受け入れる部分）は一番大きく開いた時で直径約7ミリメートルだと言われています。その大きさに受けられる光の量を基準にすると、ごく一般的な双眼鏡（レンズの直径が50ミリメートル）でも肉眼の約50倍もの光を集められます。レンズが大きくなればなるほど多くの光を集められるので、さらに暗い星まで見ることができま

2 双眼鏡で本格的に星空を観察したくなったら、それなりの光学性能をもったものを購入しましょう。街のディスカウントショップでも扱っていますが、値段の安さだけで選ぶと後悔することになります。安い双眼鏡の中には、レンズが粗悪なプラスチックのために視野の中心部でさえ像が歪んだりするものがあります。また、光軸がずれていると、見えている像もずれたまま網膜へたどり着きます。人間の脳はそのずれを修正しようとはしますが、長時間覗いているとめまいや頭痛を起こすこともあるのです。景色を見るだけなら多少の不具合は気になりませんが、星は点像なのでレンズが粗悪だったり少しでも光軸がずれていると、その見え味にも大きく影響するのです。

双眼鏡には「7×50」とか「8×35」などの表示があります。これは倍率とレンズの直径（ミリメートル）を表しています。意外に倍率が低いと思うかもしれませんが、倍率だけ高くしても視野が狭くなり、見ている対象物も暗くなってしまいます。さらに双眼鏡を手持ちで使うときには、倍率が高いと視野の揺れが大きくなってしまいます。普通に使うなら7～10倍あれば十分ですし、星を見ることだけではなく、様々な用

途にも役立つでしょう。機動性を考え手持ちで使うならレンズの直径は50ミリメートルまでとし、カメラ三脚に固定するなら直径80ミリメートルでも大丈夫です。一度購入した双眼鏡を未長く使おうと思うなら、有名な光学機器メーカーの製品を選びましょう。実際に双眼鏡を使っている人や専門店の係員に、自分が何をしたいのか、どんなスタイル（庭先で気楽に眺めるのか、車で山奥に行くのか）で星を見に出かけるのかを説明すれば最適な機種を教えてもらえるはずで

3 双眼鏡ではどんな天体に注目すればいいのでしょうか？身近なところでは、月の地形を観察したり、恒星の色の違いも確かめることができます。レンズの大きな双眼鏡を三脚に固定すれば、木星の衛星も見えるかも…。これからの季節は、アンドロメダ星雲やおうし座のプレアデス星団（すばる）、オリオン座の大星雲などに双眼鏡を向けてみましょう。肉眼では見ることのできなかつた世界が広がるはずで

まず双眼鏡を手にして星空の下へ飛び出しましょう。双眼鏡を通して、宇宙がほんの一步だけ私たちに近づいてくれますよ。

GUIDE TO DINOSAUR

誰しものが恐竜に対して抱き続ける太古のロマンとは、一体何なのでしょう？

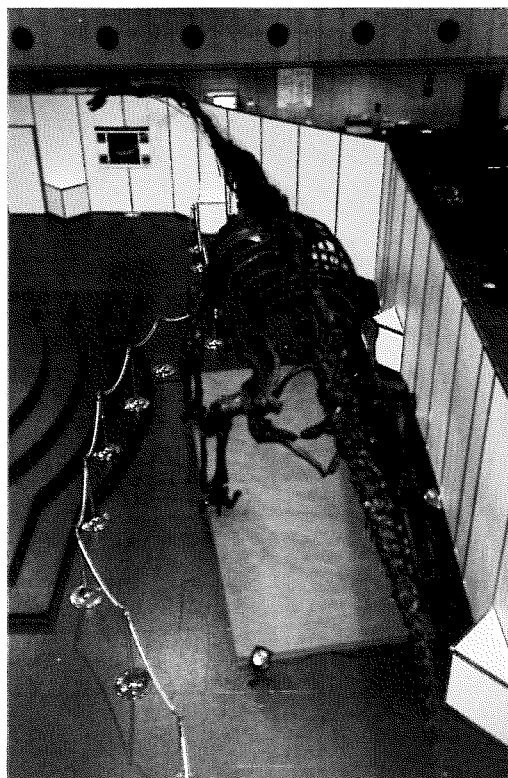
少年時代、コナン・ドイルの小説「失われた世界」を読んで恐竜に魅せられた一人として、常にその理由を考えてきました。さしずめ現在ならスピルバーグの「ジュラシックパーク」を観て、同じような衝動にかられる人も少なくないことでしょう。いつの時代にもこうした書籍や映像の主演として登場し、また、自然史系博物館の顔として、その巨大な全身骨格を誇示してきた恐竜は、私たちに好奇心と想像力を与えてくれます。遠い過去の時代から、恐竜にまつわる謎と魅惑に満ちた雰囲気

にとりつかれた人たちは、発掘・研究を繰り返してきました。郷土の森10周年を記念して、先日盛況のうちに幕を閉じた「シルクロード大恐竜展」の内容も、中国・日本隊が協力して恐竜化石を発掘した成果を公開したものでした。今だ太古のロマンを追求する作業は継続中ということになります。

▼恐竜の由来

DINOSAUR(ディノサウルス)、すなわち“恐竜”という名前は、イギリスの解剖学者リチャード・オーエンが1841年に造語したものです。解剖学的熟練と専門知識にたけていたオーエンは、イギリス諸島産の化石爬虫類の中からメガロサウルス、イグアノドン、ヒレオサウルスの3種を他の化石種、現生種とは全く異なるものと識別しました。そして、この時初めてギリシャ語のディノスとサウロス、すなわち恐ろしいトカゲという意味の“恐竜”なる言葉が誕生したのです。以来、恐竜の深い魅力は、世代から世代へと絶えず受け継がれていくこととなります。

オーエンの定義によれば、恐竜とは、直立歩行を行う四足歩行の大型爬虫類で、肉食と植物食のものがあり、骨盤に融合した5個の脊椎を持つ動物とされていました。もちろんこの定義は、現在では的外れと言えますでしょう。ただし、直立歩行という肝心な特徴は



おさえられていたのです。

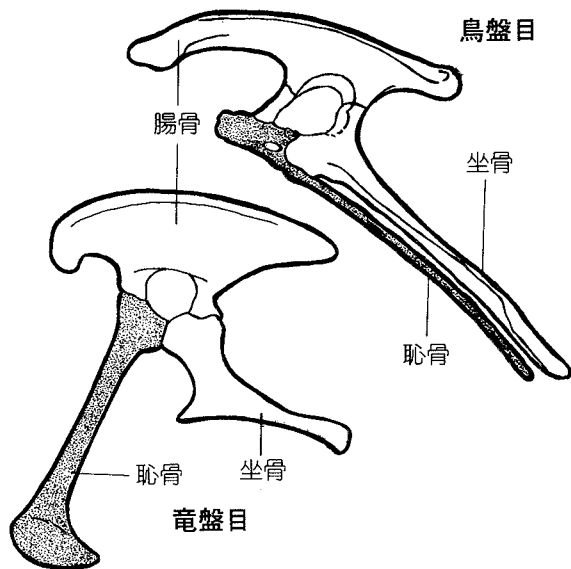
恐竜は地球の歴史でいう、いわゆる中生代の生物です。中生代は三疊紀、ジュラ紀、白亜紀からなり、約2億2500万年前から6500万年前まで続きました。従って中生代以前、または以後に生息していた動物は恐竜ではありません。たとえどんなに巨大なマンモスといえども、ここ100万年前後以内に絶滅したものであり、恐竜とは言えないのです。また、分類学上爬虫類に属するグループなので、中生代の爬虫類以外の化石動物は恐竜ではありません。厳密には、恐竜はかなり特別な爬虫類のグループであったため、すべてが陸生の動物で、強力に水の中を泳いだり、

日常的に水中生活をする種類はひとつとして存在しなかったのです。よって、プレシオサウルス類(首長竜)、イクチオサウルス類(魚竜)といった海の大型生物もやはり恐竜には含まれません。同様に飛行能力のあるプテロサウルス類(翼竜)も恐竜ではなかったのです。

恐竜は実際には、祖竜類(アルコサウルス)と呼ばれるグループに属します。ここにはワニ類、絶滅したプテロサウルス類と祖竜類の子孫として有名な鳥類など、よく知られた動物の他、槽齒類のようなあまり知られていない絶滅動物も含まれています。

恐竜が他の祖竜類とはっきり区別できる点は、先にも述べたオーエンの指摘である、極めて効率よく歩いたり、走ったりすることができたということでした。すなわち、恐竜の脚は体から外へ突き出すのではなく、体の下にたくしこまれているわけです。この変化は、化石化した遺骸の腰、ひざ、くるぶしの関節の構造の変化という形でその証拠をとどめ、おかげで恐竜の化石を他の祖竜類から区別することができるのです。

1887年、大英博物館のハリー・シーリーによって、恐竜は腰(骨盤)の構造が異なる点から、2つのグループに分けられました。図のように骨盤を構成する3つの骨の内、恥骨が脊椎に直角に突き出したタイプ、この特徴は爬虫類に広く見られるので、トカゲ型の骨盤という意味で竜盤目と名付けられました。対して恥



骨が後に回転して坐骨と平行になり、恥骨の前端が伸びて前恥骨突起と呼ばれる構造を作っているグループを鳥盤目ちようばんもくとしました。恐竜とは、この2つの系統の生物をひっくるめた総称を言うのであって、決して学問的な名称ではない通称ということになります。

▼恐竜を掘る

さて、真の恐竜についての最初の記載は、1820年代まで遡ります。ここに至るまでには、様々な出来事があったようです。恐竜は、人類が地上に出現するずっと以前から岩塊より露出していたにちがいはありません。ですがこの時期までに発見が遅れた理由として、宗教的なものが考えられています。19世紀初頭の宗教信条には、地上を満たす生物はすべて神が考えうる限りのタイプであるという理念がありました。すなわち、神が自ら創造した生物のいずれかが絶滅するのを黙って見過ごすことなどありえないというわけです。従って化石動物の発見は、その化石が絶滅の現実性を証明するかも知れないがゆえに、難問であったのです。ですから初期に発見された化石の多くは、現存種の死体としてかたづけられていたようです。

ところが、1770年に注目すべき発見がありました。オランダはマーストリヒトのチョーク採石場で巨大な化石動物の顎が発見されたのです。議論の末、最終的には高名なフランスの解剖学者キュヴィエによって海生爬虫類モササウルスのものと鑑定されました。この事実は絶滅して久しい動物の明確な存在を示すものであり、その後の巨大な絶滅化石爬虫類への関心を喚起させる源となったのです。

その後、競って恐竜の発掘に没頭していった人々は後を断ちませんでした。さらには研究者同士が切磋琢磨せつさくたくすることで、より恐竜学の真髄が明らかになっていったのです。一例として、アメリカの学者コープとマーシュの敵対関係は、大変興味深いものです。1870年、コープが数年先に記載したカンサス産のプレシオサウルスの一種、エラスモサウルスの骨格をマーシュ

に見せた時、頭が骨格の逆につけられていることを指摘され、短気なコープがマーシュに対してライバル心を燃やしたことに端を発したといわれています。そして新たな恐竜の発見と、あらゆる恐竜の遺骸を最初に記載したいという欲望に支えられて、まさに火に油を注ぐ形となったのです。マーシュとコープに雇われた探査チームは、コロラド州、ワイオミング州、モンタナ州、ニューメキシコ州と発掘の手をつけ、1877年から1890年代末まで激しい対抗心に駆り立てられ、ひたすら発掘を続けました。結果、約130種もの新種とされたのごとき数のタイプを記載することにつながりました。彼らは1890年代末にこの世を去りましたが、以後変化が起き、北米地域の細心な共同調査が行われるようになったそうです。

▼中国の恐竜

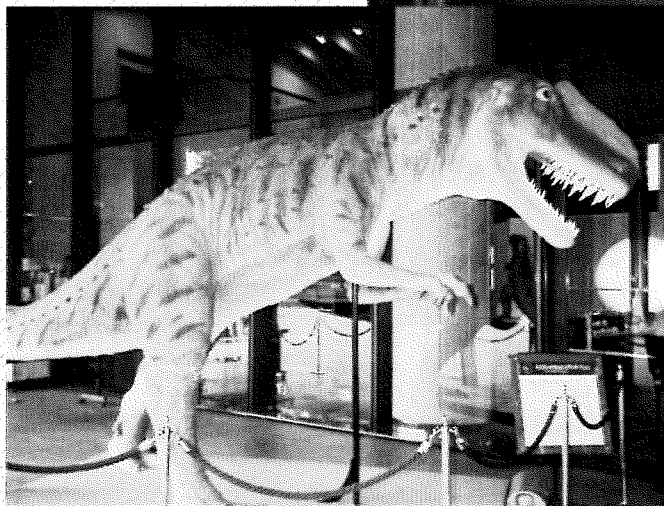
今回郷土の森で開催された「シルクロード大恐竜展」も、中国と日本の共同調査による発掘の成果展でした。脈々と続いている恐竜発掘への憧憬どうけいが表れていたように思います。前記のアメリカはもちろん、カナダ、アフリカ、中央アジアと恐竜調査の足跡は世界中に広がっていますが、中国も多数の恐竜化石が出ることで知られています。

中国における恐竜化石の研究は、1902年に始まったようですが、以来中国＝フランス、中国＝スウェーデンといった共同隊が入り、1933年以降は中国自ら、主要な調査活動を続けています。また、1949年の人民共和国成立以後、あらゆる恐竜研究は、今回の展示会にも多くの化石資料を提供した北京の古脊椎動物学研究所しゅうろくに集中し、中国の恐竜研究のほとんどが掌握されました。1950年のチンタオサウルス、1952年、及び57年のマメンチサウルス（写真）の発見は、まさに注目すべきものでしょう。今や中国は、恐竜ラッシュの地域として、発掘される化石は前世紀末から今世紀初めにかけての北アメリカに匹敵する重要性を持っているのです。

恐竜発掘の歴史が教えてくれるように、恐竜学の探求は回を重ねる度に新事実を、あるいは新仮説を導きだしています。これは、対象が現存する生物ではなく、すでに我々には見ることでできないグループという所に起因するものです。実はここに太古のロマンたる所があるように思えるのです。化石という唯一の手掛かりをたよりに、未知の領域に挑戦していく、これは壮大な宇宙や海洋を相手にしていることと変わりありません。恐竜発掘や研究を通じて地球生物の系統進化の流れを解明すること、加えて約1億5000万年にも及ぶ長い歴史を持つ種族の絶滅についての解明、人類にとってこれほど魅力的でかつ永遠なる研究テーマはそう多くはないのではないのでしょうか。

「がめらと〜きんご」

今日、恐竜と言えば、皆さんご存じの「ジュラシックパーク」！ 現代に甦る太古の恐竜が、スクリーンせましと暴れまわる超大作です。もはや、バイオテクノロジーを駆使したDNA操作によって、理屈の上では恐竜が造りだされようかという時代。数千万年前に姿を消してしまった大型生物の生きざまを、人類が目あたりにする時代もそう遠くはないのかも知れません。とりあえずは化石を見な



がら、想像・推測の世界に浸ってもらいましょう。というわけで「シルクロード大恐竜展」(7月19日～8月31日)。夏休みを利用して訪れる親子の、自由研究室と化していたようです。

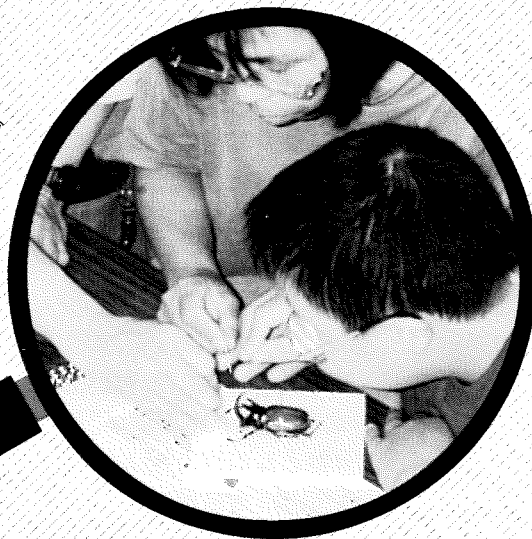
恐竜の全身骨格は、子供たちに何を語りかけてくれたのでしょうか？はるか太古の昔にその姿を消した恐竜は、「二度と我々のような絶滅を繰り返してはいけないよ」と、警告してくれているようにも思えるのです。巨大な骨の化石を眺めていると、様々なメッセージが、彼方から聞こえてくるようで..... とにもかくにも恐竜諸君、夏休みの間あ・つ・か・れ・さ・ん！

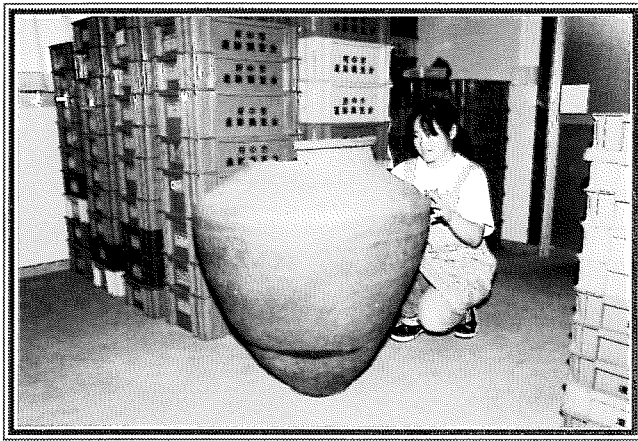
夏休みの自由研究に最適の事業をもうひとつ！

8月2・30日の2回にわたって開催した親子自然講座「カブトムシの標本づくり」。

最近では、容易に見ることも捕ることもできなくなったカブトムシ。標本の作り方なんて、なおさら縁の遠い世界でしょう。でもそれだけに興味は倍増、感動の嵐が会場に吹き荒れたのです。しかも今回の材料はゴホンヅノカブト、世界の珍しい昆虫なのです。

おっかなびっくり、カブトの脚をピンで固定するちびっこの表情はまさに真剣そのもの... いや、親の方がハラハラドキドキだったかもね。





屋内に運び込まれた甕棺

本誌38号で紹介した“鎌倉時代の甕棺墓”の続報です。今回は、墓地と考えられる方形の区画溝の中心部より大甕が出土し、その大甕の中に多量の河原石と概ね1体分の人骨が見つかったこと、また、その大甕は愛知県の常滑地方で鎌倉時代から南北朝時代に焼かれたものであることなどをお話しました。

その後、この大甕は人骨の入ったまま屋内に運び込み、発掘現場と同じような傾きと方向を再現できるように設置して、中の人骨を取り上げる作業を行なうことにしました。

この結果、人骨はほぼ1体分であることが明確となりました。また、人骨を上部から順番に取り上げていくと、足元に当たる部分に刀子（小刀）が2振り置かれているのが見つかり、さらに、この刀子の下の方から鉄製の毛抜きと木製の小仏像も見つかりました。この辺りからは、網状の炭化物の小片なども確認できました。このようにすべて中のものが取り上げられると、甕の底の中央部に穴が開けられていたことも判明しました。現在は、これら出土品の腐食・変形を防ぐ保存処理と材質の化学分析のための準備を進めているところで、まだまだ詳細は不明ですが、墓の造られ方やこれらの埋葬品からすると、この墓に葬られたのは身分の高い人物と考えてよいでしょう。

さて、ここで出土した遺物についてもう少し詳しく見てみましょう。まず2振りの刀子は、鞘に当たる部分に木質が残っていて、柄に当たる部分には糸状のものが巻かれているのが良く判ります。大きさは、全長が約25センチメートル、刃部は約15センチメートルでした。

次に、鉄製の毛抜きですが、全長6センチメートルで、U字形をしていて先端部が短く屈曲しています。その両先端はきちんと噛み合い、現在の毛抜きと変わりません。

最後に仏像は、木製の一木造で、全長約4.5センチメートルしかない小さなものです。発掘調査による仏像の出土は府中市では初めてで、まして腐敗しやすい木製であることを勘案すれば全国的にも稀なことです。土の中で腐らずに残った理由は現在分析調査中ですが、①木自身の種類による可能性、②表面に腐りにくくなるような加工がしてある可能性、③周囲の環境が木を腐らせにくくした可能性などがあります。何れにしても残り具合の良い部分では、衣のしわなどがシャープに彫られているのが良く判り、手慣れた人によって作られたことがうかがえます。

最初に述べたように、現在分析調査と保存処理をしている最中のためまだはっきりしていない部分が多いのが現状です。これらの作業が進んだ段階で、再び報告できればと思います。

鎌倉時代の甕棺墓 その二

宮町1丁目マンション地区から

府中市教育委員会

塚原 二郎



甕棺の中から見つかった仏像(約2倍)

郷土の森的ボランティア

馬場 治子

下の写真、ご覧ください。先だって郷土の森博物館へ寄託された古文書の一部です。

寄託して下さったお宅は、江戸時代には名主も勤めた市内の旧家です。邸内の蔵を一つ壊す事もあり、今後自宅に置いたままで火事にでも遭うといけなからと、この機会に博物館でお預かりする事になったのです。

博物館としてお預かりしたからには、貸倉庫の様に保管さえすればいいという訳にはいきません。これは、寄贈でも寄託でも同様ですが、これまで散逸しない様に守ってこられた所蔵者に替わって、地域の歴史資料として生かせる状態を整えなければならぬのです。そういう目的であるからこそ、所蔵者も道具屋さんに売らずに博物館へ寄贈して下さったり、貸金庫に預けずに博物館に寄託して下さるのだと思います。

その為の作業の第一歩は、整理をして中味を確認し、それが何であるのかを見極めなければ話が進みません。

そこで写真に戻りますが、1点ずつこの古文書を読み、内容を確認し、分類・整理するのは結構な仕事量になります。担当の学芸員としては嫌いな仕事でなし、時間さえ許されるなら日がな一日これを続けるのはむしろ望む所なのです。しかし、なかなか現実はそのいかず“誰か助けて”と少々弱音を吐いてしまうのが実状です。援軍は何処から来るのでしょうか。

もし幸いにして予算が潤沢じゆんたくに使えるのなら、いわゆる専門家を探してお任せする事もできるかもしれません。作業の能率も良いでしょうし、誤りも少ないでしょう。しかし、館には仕事の結果は来ても、その過程で得られたものは個人の学問業績の中にしか蓄積されず、博物館としての経験

も地域に密着したのものには成り難いでしょう。幸か不幸か予算も無いのが現実ですが、お金さえ出せば良い訳でもなさそうです。

とすれば次に考えるのは、これらの古文書を地域の歴史資料として見たいという欲求を持っている人達にボランティアとして当たっていただく事です。持てる能力を生かし、出来る範囲で助力するのがボランティアの原則だとしても、この場合は古文書を読めることがどうしても要求されます。今時、外国語より眼に付かない古文書を読めない限り、応援は期待できないのです。しかも助けを望むだけでは虫が良すぎます。

でも郷土の森も伊達に10年を過ごして来たではありません。博物館の現有勢力でこなせる仕事量は目に見えていましたし、何より地域の史料について一緒に考えてくれる仲間を増やしたいと‘歴史講座’と名付けて、地域の古文書をテキストに近世史を勉強する講座を続けてきました。

この講座に1度入ると、中級講座と合わせて5年間在籍でき、その間に“文字を読む”事を基礎に、その“文意を読む”さらに“行間、背景を読む”練習を積みます。さらに、対象としている史料は人間の営みの記録ですから、個人情報を含む例もあります。これらを冷静に歴史事象として扱う態度もこの間に培っていきます。

初めは字が読めた喜びに小躍りし、次に文意が解けるともっと知りたいと思うようになり…と徐々に学習に拍車がかかるのが大抵の会員のたどる道に見受けられます。

そして今では講座の年限が終了しても、自主グループで勉強を続けているOB会も出来、順次講座の修了生を受入れて下さっています。現在、博物館では、この方達に資料整理にあたってもらえるよう話を詰めているところです。

時間をかけて館との信頼関係を築きながら‘仲間’となり、博物館の人的な支えとも成って下さる、こんなボランティアの協力を目指しています。

